

総務経済委員会

行政視察報告

4月15日から17日にかけて、委員7名、事務局随員2名で、北海道苫小牧市、ふらのまちづくり株式会社、北海道千歳市を視察してまいりました。

■北海道苫小牧市

・指定管理者制度モニタリングについて

苫小牧市では、平成18年度から指定管理者制度を導入し、平成22年度にモニタリング実施要領を策定、現在、全62施設の評価結果を市ホームページで公表しています。また、指定管理者と所管課で年2回の意見交換会を実施し、市民からの声を共有する場としています。

その結果、業務の質向上や運営の改善につながっているとのことでした。

・まちなか交流センターコトマについて

指定管理施設である「まちなか交流センターコトマ」は、苫小牧駅前の商業施設跡地を活用し、平成26年に整備されました。カフェ、多目的ホール、活動室、学習スペース、観光案内所を有し、多世代が集い、学び、楽しむ交流拠点として、また、地域情報・観光情報の発信拠点として、まちなかのにぎわいを創出しています。



▶コトマカフェ

・市有施設のネーミングライツ（命名権）について

苫小牧市では、市有資産を広告媒体として活用することにより新たな財源を確保すること、また、民間事業者等に地域貢献の機会を提供することを目的として、平成26年にネーミングライツ基本方針を定め、ネーミングライツの活用を推進しています。

現在、体育施設10施設のほか、公園、道路、公衆トイレにもネーミングライツを導入し、予算は年間約1千8百万円を見込んでいるとのことでした。

このような取り組みは、本市でも今後検討していく必要があると思いました。

■ふらのまちづくり株式会社

・フラノマルシェについて

富良野市は、ドラマ「北の国から」のロケ地やラベンダー畑などの素晴らしい観光資源を有し、年間200万人を超える観光客が訪れていますが、中心市街地には魅力的なコンテンツがなく、来街者数は年間6万人程度でした。さらに、基幹病院が郊外へ移転したことが拍車をかけ、まちなかは衰退する一方でした。

このような状況を打破するため、地元の企業や個人の出資により「ふらのまちづくり株式会社」が設立され、行政と協働し、中心市街地活性化を推進しました。

約2千坪の病院跡地を活用し、平成22年に「フラノマルシェ」を開業しました。フラノマルシェには、地場産食品を生かした店舗や、イベントができる多目的広場があるほか、国道沿いに立地することから、まちの玄関口として観光客をまちなかに周遊させ、にぎわいを創出しています。

さらに、「超高齢化社会」に対応する、歩いて暮らせるコンパクトなまちづくりを実現するため、賃貸住宅、市立保育所、サービス付き高齢者向け住宅、クリニックも集積し、市民も集える滞留拠点として機能しています。

フラノマルシェの来場者数は年間120万人を超え、まちなかは人々にぎわうようになりました。観光客だけではなく地元住民にとっても魅力あるまちづくりを進めた結果、「コロナ禍でも集客は落ち込まなかった」とのことでした。



▶フラノマルシェ

■北海道千歳市

・千歳市防災学習交流施設について

千歳市防災学習交流施設は、中核となる防災学習交流センター「そなえーる」のほか、「学びの広場」、「防災の森」からなる施設です。

千歳市は三方を自衛隊に囲まれており防衛省の補助採択を受け、この施設が整備されました。総事業費は21億円、国庫

補助率は75%とのことでした。

「そなえーる」は、「災害を学ぶ・体験する・備える」をキーワードに、いろいろな災害の疑似体験をしながら、防災に関する知識や災害が発生したときの行動を学べる施設です。地震の揺れを体験できる施設や、火災時の煙を再現し避難体験ができる施設などがあり、市内の小中学生が授業で訪れるなど、防災学習の拠点として活用されています。大地震などで市役所庁舎が使用できない場合には、災害対策本部としても利用できるようなっています。

「学びの広場」は、雨水調整池及び消火・救出体験ができる広場となっています。「防災の森」は、調整池を兼ねた多目的広場や災害時を想定した野営生活訓練ができる広場などがあり、キャンプ場としても利用できます。

施設全体の利用状況は、平成22年のオープンから15年間で延べ52万人以上の利用があり、市民の防災意識向上に寄与しています。

災害はいつどこで起こるかわかりません。このような充実した施設の整備は大変有意義であると感じました。

■視察を終えて

今回の視察事項については、今後の委員会の取り組みに生かしていきたいと思えます。



▶そなえーる